

船舶事故調査報告書

平成30年10月24日
運輸安全委員会（海事専門部会）議決

事故種類	衝突
発生日時	平成30年4月26日 12時15分ごろ
発生場所	山口県周防大島町笹島北西方沖 笹島島頂から真方位321° 380m付近 (概位 北緯33° 54.4′ 東経132° 23.4′)
事故の概要	漁船MARUYAは、東進中、また、ミニボート（船名なし）は錨泊中、両船が衝突した。
事故調査の経過	平成30年5月16日、主管調査官（広島事務所）を指名 原因関係者から意見聴取実施済
事実情報 船種船名、総トン数 船舶番号、船舶所有者等	A 漁船 MARUYA、1.7トン YG3-56251（漁船登録番号）、個人所有 第291-33662号（船舶検査済票の番号） B ミニボート（船名なし）、総トン数なし なし、個人所有
乗組員等に関する情報	A 船長A、二級小型・特殊・特定 B 操縦者B、操縦免許 なし
負傷者	A なし B 軽傷 1人（同乗者B）
損傷	A 船底外板に擦過傷 B 船首部外板に擦過傷
気象・海象	気象：天気 晴れ、風向 東北東、風力 2、視界 良好 海象：海上 平穏、潮汐 低潮時
事故の経過	A 船は、船長Aほか1人が乗り組み、漁を終えて帰港の途につき、約20ノットの対地速力で笹島北西方沖を東進していた。 船長Aは、操舵室で椅子に腰を掛け、手動操舵により操舵に当たっていたところ、ゴツンという音を聞き、B船と衝突したことを知った。 船長Aは、船首が浮上すれば船首方に約15°の死角が生じることを知っていたが、本事故当時、前路に航行の支障となる船はいないと思い、死角を補う見張りを行っていなかった。 B船は、操縦者Bほか1人が乗り、笹島北西方沖において、船首を北方に向けて魚釣りを行いながら錨泊中、操縦者Bが、左舷方に接近するA船を認め、立ち上がって大声で叫んだもののどうすることもできず、A船と衝突した。 B船は、約1.5mの竿を立てていたものの、有効な音響による信号を行うことができる手段が備えられていなかった。

<p>分析</p>	<p>A 船は、笹島北西方沖を東進中、船長 A が、船首を左右に振るなどして船首方の死角を補う見張りを行っていなかったことから、前路で錨泊中の B 船に気付かずに航行を続け、B 船と衝突したものと考えられる。</p> <p>B 船は、笹島北西方沖で錨泊中、操縦者 B が、魚釣りを行っていて周囲の見張りを適切に行っていなかったことから、接近する A 船を認めたものの、どうすることもできず、A 船と衝突したものと考えられる。</p>
<p>原因</p>	<p>本事故は、笹島北西方沖において、A 船が東進中、B 船が錨泊中、船長 A が、船首を左右に振るなどして船首方の死角を補う見張りを行っておらず、操縦者 B が、魚釣りを行っていて周囲の見張りを適切に行っていなかったため、両船が衝突したものと考えられる。</p>
<p>再発防止策</p>	<p>今後の同種事故等の再発防止に役立つ事項として、次のことが考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 船長は、船首方に死角が生じる場合、船首を左右に振るなどして死角を補う見張りを行うこと。 ・ 錨泊中であっても、周囲の状況を確認すること。 ・ 長さ 12 m 未満の船舶は、汽笛及び号鐘を備えていない場合、有効な音響による信号を行うことができる手段を講じ、接近する他船に注意を喚起できるようにしておくこと。